

○ミヤマツチトリモチの新産地 (遠藤正喜) Masaki ENDO: A new locality of *Balanophora japonica* Makino var. *nipponica* Ohwi

ミヤマツチトリモチは、本邦の何れの地方にも産するが中部以南での記録は少ない。九州では熊本県五箇荘産(1962年)の報告がある。遠藤は1963年8月17日に大分県直入郡久住町に属する九重山群中の久住山南面の本山の標高1,200mの地点でミヤマツチトリモチを発見し採集した。生育地はミズナラ、ブナ、シラキ、カエデの類、タンナサワフタギなどの落葉広葉樹林地で、林床にはテンニンソウが繁茂した所である。森林土壌の腐植層は10cm程度で、ミヤマツチトリモチはタンナサワフタギの根端部に寄生し、花穂は落葉に覆われて僅かしか見えなかった。花穂は穂せかかった橙黄色で、その長さは3.5—4.0cm、花茎は5.5—7.0cm、根茎を合わせた全体の高さは約14cmである。本県南部のシイ林内にはツチトリモチ(*B. japonica* Makino)が多く分布するが、宮本・大友(1952年)が由布岳の標高1,200mで採集した以外は、何れも低地である。由布岳の産地は久住山のミヤマツチトリモチの産地に類似している点があるので今後も注意したい。おわりにミヤマツチトリモチに関する知見を与えられた大井次三郎先生に感謝の意を表す。



Fig. 1. *Balanophora japonica* Makino var. *nipponica* Ohwi. (×1/3)

(大分市立碩田中学校)

□ 陳那傑等編著：中国蘚類植物属志，上冊，304 pp. 1963，北京科学出版社 1940年に東亜産 Pottiaceae のモノグラフを公表し，戦後は南京師範学院で活発に蘚類の研究を進めている陳博士等によって上記の書が出版された。巻頭の86頁は蘚類の形態と生活史，生態と地理分布，科の検索表である。各論は *Sphagnum* から *Timmia* に到る132属が取扱われている。目及び科の記載に続いて，各属の記載，模式種と種の総数，更に中国に産する主な種とその産地を簡単に挙げてある。目の配列は Archidiales を Dicranales から分離してあること，Fissidentales を Dicranales と Pottiales の間に置いた点を除いて，略々 Brotherus (1925) に従っている。学名以外，総て中国語で書かれて居り，我々には理解が困難な個所もある。属名には提灯蘚，珠蘚，白髮蘚，絲爪蘚，黒蘚，松蘚等々訓読すればそのまま和名となるものが多い。我国とは最も密接な関係にある中国の蘚類フロラについては，今まで二，三の書からその一部を覗く程度であった。本書は属を主にしたものではあるが，中国蘚類フロラの概要を知ることが出来，出版の意義は大きい。下冊の完成が待たれる。

(岩月善之助)